



「ごりやく市」でにぎわう様子

❖沿革

三河湾の沿岸に位置する蒲郡商店街振興組合は昭和39年2月8日に設立され、その後10年という短い期間で急速に発展を遂げた。

この急速な発展を支えたのは「地場産業である繊維産業」と「商店街の立地環境」である。蒲郡市は江戸時代以降より、百余年にわたり三河織物の中心地として古くから繊維産業が盛んであった。

組合の設立時が高度経済成長期であったことも幸いし、輸出品の要として繊維産業は最盛期を迎え、市民の生活は潤い、街には多くの人が行き交い活気があった。また、当商店街は蒲郡市の中心市街地に位置し、近隣には市役所や市民会館といった公的機関が揃っているほか、国道23号線、JR・名鉄蒲郡駅に面するなど良好な立地にある。こうした時代背景や環境に恵まれ、昭和50年代には賑わいの

絶頂を迎えていた。

ところが、平成に入ると厳しい状況に置かれることとなる。かつては繁栄を極めた繊維産業の衰退や、地域経済の停滞、郊外を中心とした大型ショッピングセンターやコンビニエンスストアの進出による売り上げの低迷が、さらなる追い打ちをかけ、当商店街の景気は次第に悪化していった。現在では、店主の高齢化や後継者不足により、店舗数は全盛期の半数ほどに減少している。

以下では、この困難な現状を打破し、かつての賑わいを取り戻すべく、「エコまい!憩まい!行こまい!蒲郡商店街」をキャッチコピーに掲げ、商店街や行政、市民が協力して取り組んだイベント「福寿稲荷ごりやく市」をご紹介したい。

❖商店街を取り巻く環境

蒲郡商店街はJR・名鉄蒲郡駅を中心に点在する中央通り発展会、銀座通り発展会、駅前通り発展会、中通り発展会、北駅前発展会、本町通り発展会、神明・八百富発展会の7つの発展会により形成されている。

蒲郡商店街においても店主の高齢化や後継者不足が進展しており、以前は発展会ごとに開催されていたおまつりも、担い手となる若者の減少で継続困難となるなど、商店街の活気が失われているのが現状だ。

また、蒲郡市は県内でも高齢化率の高い地域であり、当商店街の周辺にも多くの高齢者が暮らしており、こうした高齢者が暮らしやすい環境づくりも地域のニーズとして求められている。



日常の商店街の様子

取組

福寿稲荷ごりやく市



イベント



連携・協働



キャラクター

❖取組を開始したきっかけ

「福寿稲荷ごりやく市」(以下「ごりやく市」という)の発端は、平成13年3月に蒲郡市が策定した「蒲郡市中心市街地活性化基本計画」と平成14年3月に蒲郡商工会議所が策定した「蒲郡TMO※構想」だ。これに基づき中心市街地の活性化を進める中で、新たなイベント及び販促事業の素案を考案中に、蒲郡商店街から「門前町の様に、駅から商店街を歩いて寺に向かう流れができれば、賑わいを創出できるのではないか」という意見が出て、薬師寺内の福寿稲荷にあやかった新たなイベントの企画検討が始まった。

その後、春日井市の勝川駅前通商店街「勝川弘法市」の仕掛け人、野尻博氏を迎え講演会を実施するなど独自の勉強会を開き、平成15年11月に蒲郡商店街・蒲郡市議会議員・市役所・蒲郡商工会議所・NPO法人等で構成された「ご

りやく市実行委員会」が発足し、その翌年の平成16年9月に第1回の「ごりやく市」が開催された。

(※Town Management Organization)



実行委員会による話し合いは毎週行われている

取組の概要 >>>>

「ごりやく市」は、蒲郡商店街を中心とした「ごりやく市実行委員会」が運営しており、毎年6回3・4・5・9・10・11月の第4日曜日に開催されている。

平成16年9月26日に始まった第1回から平成25年11月24日で第58回を迎え、会場となる中央通りの約400mの区間は歩行者天国となり、市内・外からの一般公募による出店者と地元商店街からの出店者でカラフルなテント約50店が立ち並ぶほか、愛知大学落語研究会の落語、大道芸、蒲郡高校の演劇部によるチンドン屋等イベントは多岐に渡る。昨秋の「ごりやく市」では、蒲郡高校のダンス部がAKB48の「恋するフォーチュンクッキー」を踊り、会

場を大いに盛り上げた。

また、「ごりやく市」のマスコットキャラクター「こんきち」は、近年のご当地キャラブームもあり認知度を高めている。

「食べる・見る・買う」のバランスのとれた魅力ある催しは、大変好評を得ており、来場者は市内・外から毎回4,500人ほどが訪れるほどだ。

ちなみに、「食べる」の中でもアサリのだしが効いた「ガマゴリうどん」は人気メニューで、平成25年9月に滋賀県の東近江で開催された「第3回全国ご当地うどんサミット in東近江」ではグランプリに輝き、蒲郡の知名度やブランド力が高まった。